

東

神齋大内决土菴



活夜素燈事

Handwritten text in a cursive script, likely a list or index, contained within a rectangular border. The text is written vertically and appears to be a series of entries or names.

Handwritten text in a cursive script, likely a list or index, contained within a rectangular border. The text is written vertically and appears to be a series of entries or names.

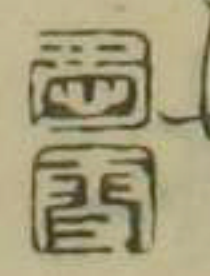
者象 官命以業游三年其歸
之日著東蝦夷夜話三卷凡蝦夷東
部之山川風俗幽遐之觀草木之象
皆記所目擊而一無贅空揣懸之言
使讀者如親遊其地當生事余所先
期於是得焉嗚呼大內君可謂真好
奇之士也且余有感於此書見其所

記載僻陋無教化之地而孝子貞婦往
往有焉資質敏捷者義勇者不寬
由是觀之苟能拓之教之變為魏然
良國則人材豈不彬乎昔人有言峰
嶺扶輿磅礴之所感必生魁奇忠
信之民蝦夷豈夫然哉余將期之地
日矣

安政庚申三月識于神田橋大門外
 小衙衙之舎江戸益堂鈴木善教

正齋柳貞亮書



佐眼水母


序

黃
北山老羅猛於虜。白日橫行太
跋扈。山下小徑行旅絕。山隈人
家晝閉戶。東隣樵夫昨不歸。
西舍今喪牧牛兒。曉搜蹤
跡。索殘骸。血染野草紅淋

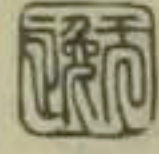
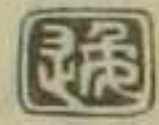
漓。老翁一話極悲慘。勸翁
徙居翁不領。幸無苛政剝
肌膚。老羅雖暴去何敢。

老羅行

白榮孝
印

喜多君所畫東阪肆古多無島十景之一

戊子孟秋
於源逸



序

三





まは子

おふくを免えたるの

めの子乃んきう

あはれに有歟

おふくを免えたる

せ(6)

庚申冬日宮於

七里志岬堂

筆雲 計

東蝦夷夜話例言

一 己まゝの北行也。

官より仰ぶまがら僅小三季ふりあ

帰府せしも中途より病状發し且靴も穿るまの市色也。

まゝやむと成るるあり。まゝの地乃事ども。詳し考究せ

せし西部の地とて。いふもまゝと止し。ハ幸ふたてまゝ。ま

中兄同きるまゝ。まゝ習俗の傳古。炭油乃赤絶いさう。か

ゐの扱言乃物。禪柄は供をわよ。いと唱呼のまゝ。い

冊子綴り。畫工の修飾を加へ。東蝦夷扱言と名づ

まの帰府の扱言。友人忠己の彼地乃事。扱言と名づ

まの扱言。扱言の扱言。扱言の扱言。扱言の扱言。扱言の扱言。

東蝦夷夜話

九例

地を踏む其跡を記し。其裏を借へんと欲するは文の卑陋なる歟。
身の人を踏むるは其の跡を記す。其裏を借へんと欲するは文の卑陋なる歟。

一 蝦夷地の正史記あるもの。許多あるうち。白石先生の蝦夷志は第一

あつて是より後に。あつて彼の地を備ふる乃赤熾なり。かの是は書い

より。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

一 盲衆盲を引て。老角は誤り。其の地は。今目新なる。其の文は。相

違なり。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

言明者の正史記あるもの。許多あるうち。白石先生の蝦夷志は第一

一 蝦夷地の言語内地に通じざる。其の地は。今目新なる。其の文は。相

習性。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

東蝦夷夜話卷之上

江戸

大内餘菴編述

○ 蝦夷地乃東西極星の地。其の地は。今目新なる。其の文は。相

六分より。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

全く。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

あつて。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

より。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

凶年。其の言信し。徴をききたまあり。その他乃書不備

種梁炊てへむ華言美服を信めく出人ごとくついでも愚ふじむ
乃處置を創業者よりいそ且乃あるところとぞあう且も日月星辰
西南北天地十二方角ともそとく名を銘トあり且も寔は全備の一大國
みて隋書に小倭といふも實なるところなり平竟地夷地乃風俗と交へん
とふまの昔寛文の度專干戈の動き一頃よりあましく其時武威もく
長服きめあむそを速ららん今四海太平の時代みあうといふ
く人なきをいふもきよ人情狡猾みあうゆえに道とて人利害を流した
衣食の美惡殊なるもあうて却て始より道とて人利害を流した
らんゆい今後良民とあり人種も増えきり思の地は且安政三
年丙辰の八月振夷地御備地を付らんと同月廿一日江戸を發し二十

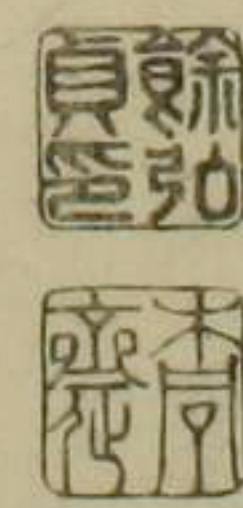
登き炊といひつといふべきをちといふ登人が東部の地名クリ炊
クリといひ。オホツナイとオホチナイといふの類。平竟夷羽の書才二
才三の接も入り遠ひく唱つ且ごり。夷言は於ては顛倒ハ決し
あやぬを夷人も華言をいそんとて却て正言ハ決り本意を正し
さむべそのまゝなりて。あるそ乃名を固きまると死ハ夷地の夷言ハ
海の子殺しといふ登し。

一 卷中。禽獸魚虫草木玉石等。まゝ食料はよきものまでもいざ
たくい思ひといふも。物産を鑿定し。業石を辨識する工と云ふより疎
らむべ。愁は杜撰と述んまり。業の先生乃著者。夷地物産の書も
ハ其の目録編み減きり。友人阿部亨父の説より。二 次揚出そのも。

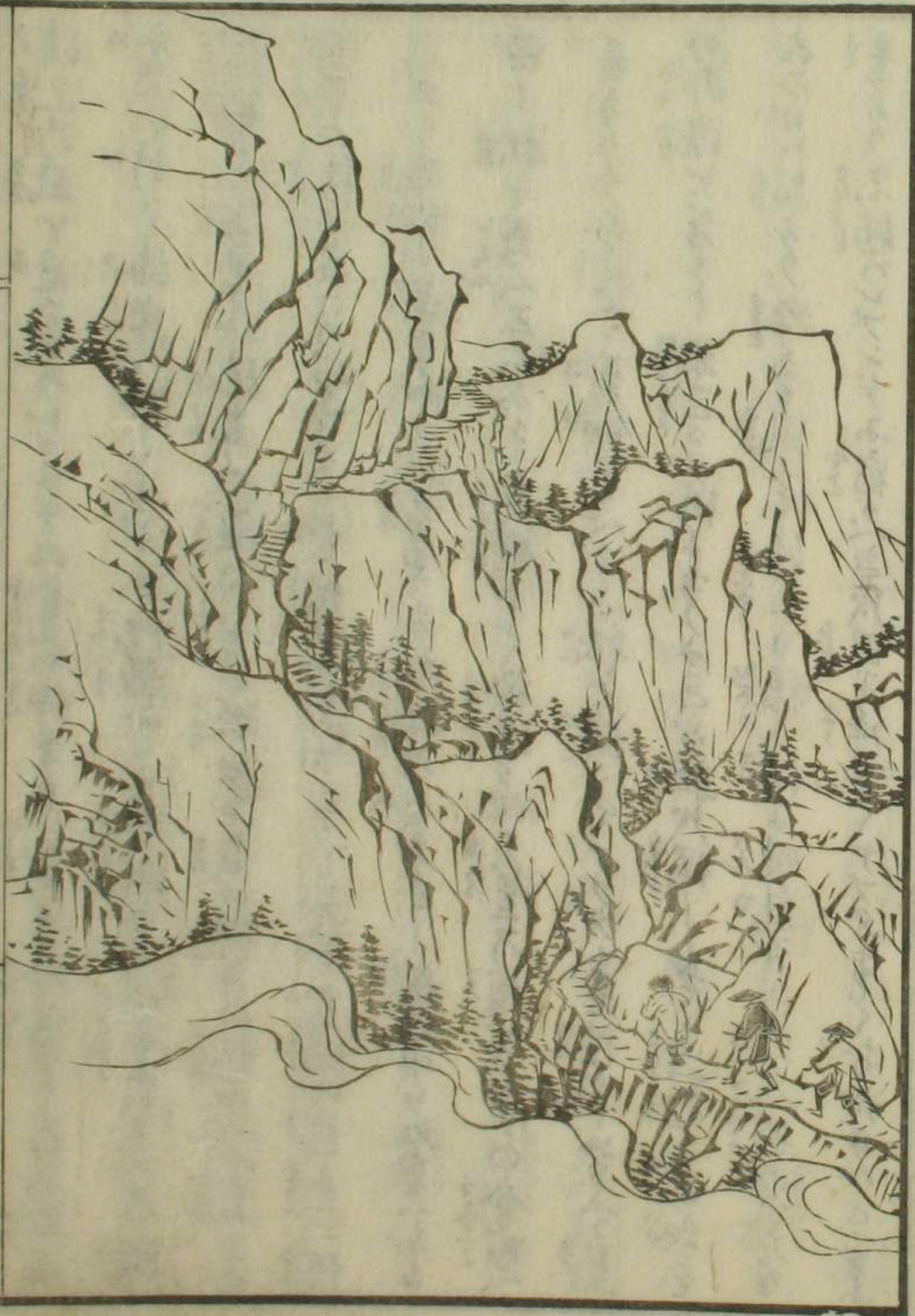
一 邊外算る湾下の地は居住するもの多し邪と毒葎の冷氣芽蒸
 ちく。血沫苗停悪汁膿結するより。かの青腿下疳の類と病む。あま
 清の陶起麟とのふの願其証を偽おく。洋人のいふシケウルボイクある
 状。洋人まゝ壞血病と収まる不の病るべし。其の是是皆の醫案活証
 も。昨ある一地きたは。そ先よきんと思ひ。次書碑文花園ありて。
 此書と梓は。鶴んと。歎く。かまふ。おの目。類門は。関らぬこと
 さら。其ふ任さる。唯恐ら。人の田。転るの。消あらん。と。歎。

安政七年庚申二月

桐齋餘弘貞識



昨日より箱館へ着ぬ。こゝより東越美地のアツケニ。佐賀作と。渡
 き。且十月朔日。同。和。歎。其日。箱館より五里。往。く。大野。沢。宿。一
 二日。の。駒。嶽。の。麓。を。越。す。其。の。本。の。い。ふ。沢。宿。は。宿。の。越。美。人。の。す。い。し。ヤ。モ
 の。風。俗。は。化。し。あ。ま。と。ん。け。く。う。は。沢。宿。より。船。を。白。の。嶽。の。麓。を。越。す。エ。ト。モ。押。へ
 渡。海。ま。さ。る。一。地。の。さ。る。陸。地。あ。ま。と。ん。陸。地。を。ゆ。く。い。ふ。あり。是。日。ハ。シ。ヤ。モ。地。と
 越。美。の。境。を。越。す。ヤ。ム。ク。シ。ナイ。て。ふ。取。宿。は。宿。の。越。美。人。の。す。い。し。ヤ。モ。地。乃。出
 入。と。改。め。門。も。二。重。よ。ま。と。ん。い。ふ。き。梅。子。の。聖。四。日。馬。城。通。く。ラ。シ。ヤ。マ。ン。ハ。お
 ち。る。ヤ。ム。ク。シ。ナイ。より。こ。の。こ。ろ。一。地。を。越。す。梅。子。の。聖。四。日。馬。城。通。く。ラ。シ。ヤ。マ。ン。ハ。お
 負。場。取。り。と。い。ふ。き。越。美。の。地。ハ。入。り。こ。の。こ。ろ。一。地。を。越。す。梅。子。の。聖。四。日。馬。城。通。く。ラ。シ。ヤ。マ。ン。ハ。お
 シ。ヤ。マ。ン。ハ。より。三。里。あ。ま。と。ん。シ。ツ。カ。リ。の。小。休。所。あり。こ。の。道。より。過。渡。する。と。い。ふ。也

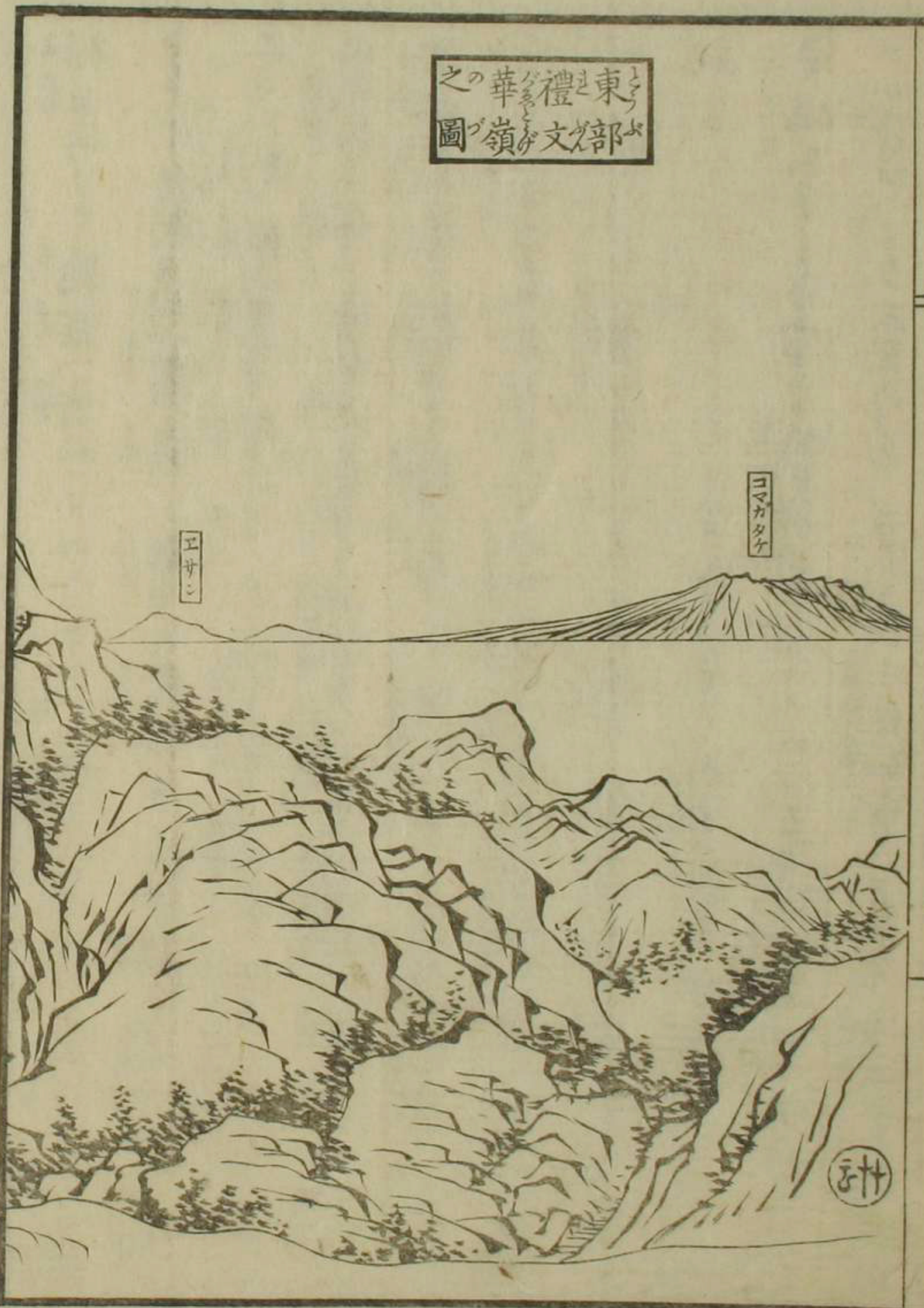


東蝦夷地

卷之上

三

東蝦夷地
禮文部
之華嶺
圖



東蝦夷地

卷之上

34

極の難不ありと云佛坂若去遠返一まどのいとも隘勇乃不あり山を
名かの泥え夜ありていふもさるふ道坂振き遠廻りまをうりまく遠まエリモ
押成んおろしきまはせりるうとささし隘勇なる山は険は険は溪水漲る
まのとききてたどるうくに九一尺ありあらん麓の足踏ま旅の脱るど岩中に
中をく今踏し一めとえめゆるるの清き山中に案内の主人英人へ己が
先へ以然し百とてる小者の遠後色は地をそまるとるは獨馬よめて
かの猛獸の足跡を追ひてゆくまでもゆくゆくもか細きこの限りゆまん
ゆくゆくとサル川の小休取らぬは皆も集りあそそかも流居り
ささしどのこまびの旅路も 公より押をとり旅長と承りゆくまはるるれ
ばまの勢ゆるるは必不をえゆくこまのまは旅長光のむやく不まらん

昔近藤守重サルの新道をひらくとくようこのころ東都の往來も安ら
あつくまるといふ其功業記一板は携りてトカチの往來をささく
ありとぞ其文を掲ぐ

蝦夷東北之徼。自射麻兒至尾朗。涉海岸之峻。若
鞞筑子。隄内。巉巖絶壁。登降趑趄。蟹步螺躍。蟻附
猿攀。誤失一步。則壘粉必魚腹。夷族死此。峻間亦
有之。江戸輔軒使近藤君。一徑此峻。有意新開道
於山後。惠登呂府安歸之日。風雨阻道路。塞滯滯
數日。於是慨然發憤。與通詞某及夷族高議。出資
散財。自留邊志。別溯水。至神艾留。按針南谷。流而

東夷傳卷之十一
卷之十一
五

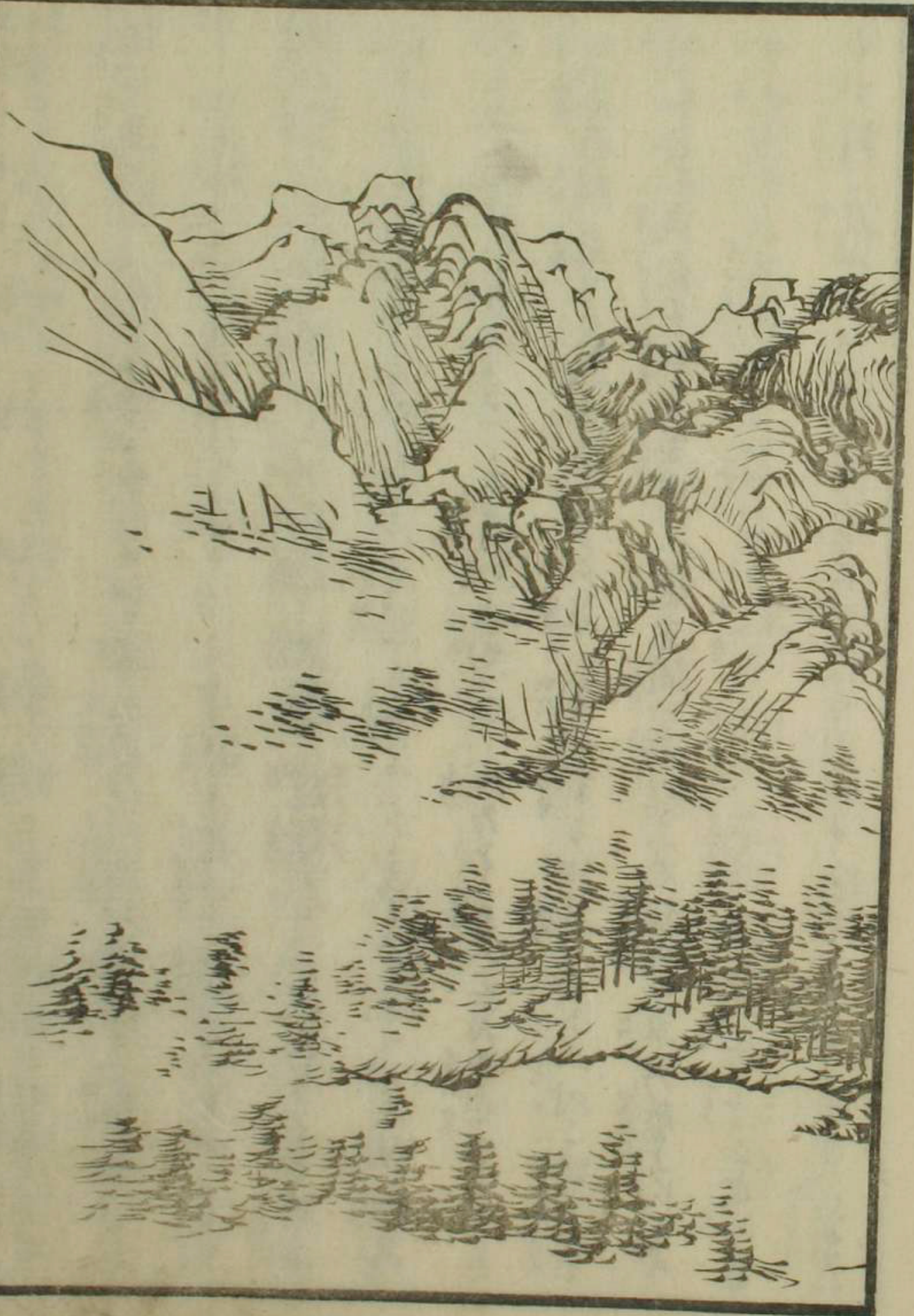
至^ル鑿^ク田^ノ奴^ノ月^ヲ登^リ降^リ凡^ソ三^ノ里^ヲ而^シ近^ク伐^リ木^ヲ架^シ流^ニ為^シ橋^ト碎^ク
石^ヲ投^テ谷^ニ為^シ梯^ト行^ル路^ヲ初^メ兌^リ跋^シ涉^シ無^ク危^キ人^ヲ夷^ニ賴^リ之^ヲ是^レ所^ト
以^テ江^ノ戸^ノ餘^リ澤^ノ波^ヲ及^ビ夷^ノ族^ヲ而^シ為^シ近^ク藤^ノ君^ヲ思^ヒ人^ヲ思^ヒ夷^ノ之^ヲ
陰^ニ德^ヲ也^ト余^ハ與^リ其^ノ事^ヲ記^シ姓^ヲ名^ヲ掲^ゲ刀^ヲ勝^リ神^ノ祠^ト大^ニ日^本寛^政
政^十年^戊午^十一^月朔^庚申^江戸^輜軒^使近^藤君^重藏^從者^下野^源助^録

金平 通詞 豊吉 夷族六十八人

餘^ハ菴^按む^ニ通^詞の^肩子^金平^とあ^る人^也時^傳員^人乃^目標^とす^るの^心
ひら^と唱^へる^まま^一今^の傳^員人^ハ於^浦赤^七福^傳屋^{あり}ま^ま松^本家^に
宿^の市^人も^目標^とす^る呼^做と^便り^とす

トカチるビラウとよぐもの名を稱へ乃布きとく寛政の頃よりトカ
チとよよりさくトラブイよりオホツナイのころ西水と足波を連山十
里よりさくとも海をよりの三回里隔て見え渺茫なる原野ありて大小
乃川と殊ふありまのオホツナイ。シヤクベツの海岸悉く赤豆を散ち
て小石をうろくスリ。アツケシまぐも物なドとよぐもの名はアツケシの名
が朱化石ふ作すくめふ記さくまぐも十月廿四日クスリ領のゼボウ
シ小宿とありアツケシまぐも山道五里ゆくべき人馬の勞といひ且ま乃日
幸海上風と直徑二里半次捲送すの船ゆくゆく辰巳ノ文馬場並演ふア
ケシ乃バラサレ押さす同小船と捲きろわどに末の半ふアツケシの會和安宿
たり實子箱館より陸地百六十七里東北乃極地小徑近きなり路のたふ

東段三ノ右 卷之十一 六



百八景

卷之八

下



さ
ま
留
り
の
山
中
の
見
嶺
之
圖

計

東海道

卷之八

下

時節から風雲を案じが田ふも似せいと安く洋々たる徳風の吹届きてや
何一ツ足つぬとまじく歩み疾きむらまの海乃形勢を歴説し暮るにホロイ
ツもより西ハサル。ユウブツ。ニイカツプ乃日ころ珠は露上の土地まゝ赤いトカチ
傾みおつぎクスリ傾む大河裁筋の流しと確踏とまぐにたよりと曠系
数十里は延袤をさぬ山海乃産物もまゆりくあら。日ころこそ耘耕乃
地とままきさるるまじくも冬の上旬より少るく暮る三月下旬より
少雪乃解果るといふはまじく草の雪乃解る候待りより一吋は露出暫
時がほどに成長を成す雪中に礫を間の氷のや抽出る草乃勢よりしめ
き味もまゝ甚強しその中少く款冬 虎杖 羊蹄 蓬蒿 牛蒡など何れ
も丈許は及ぶ候ゆへ考ふに五穀も内地よりより中々異子の少雪に

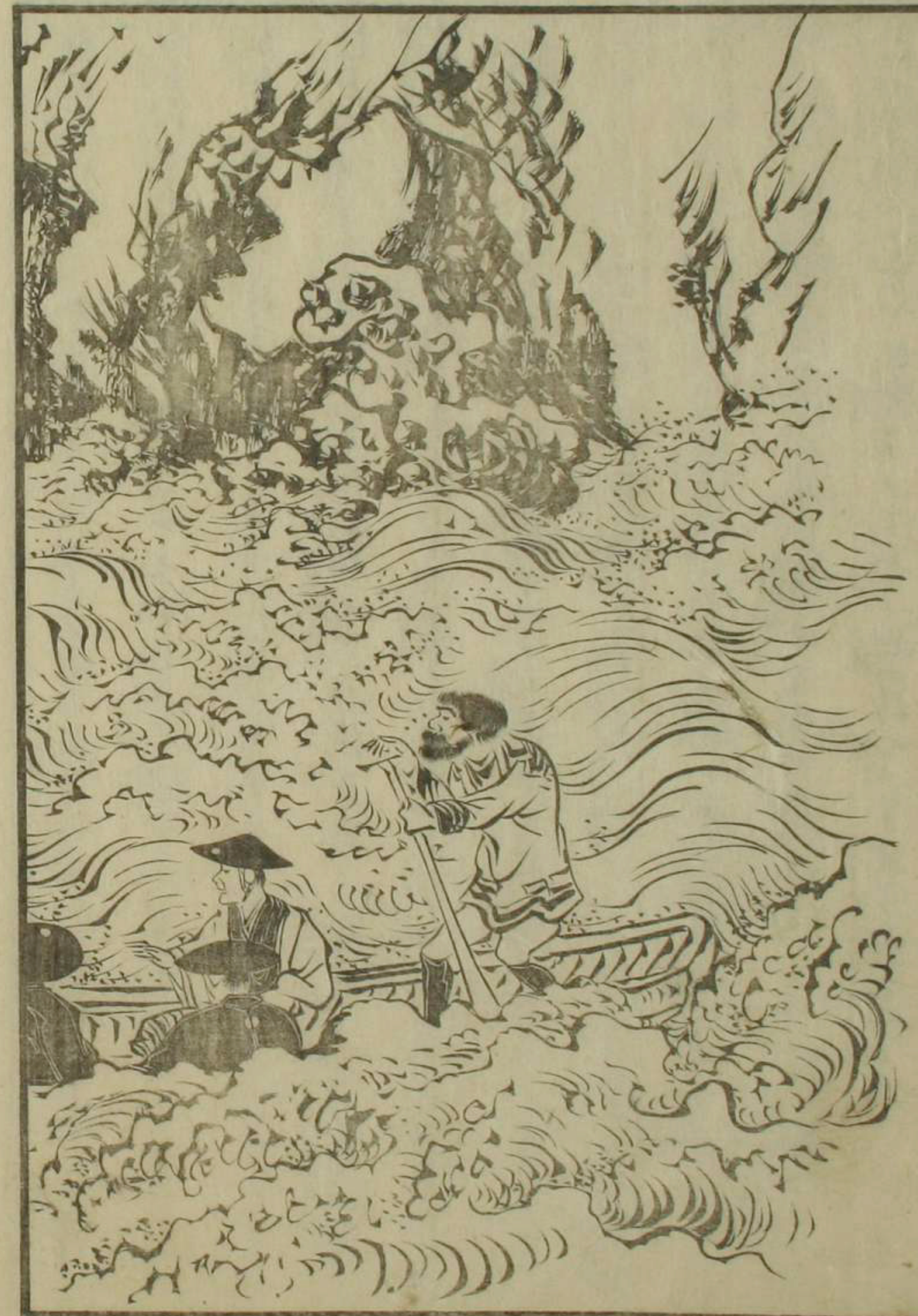
堪く且初生のうち莖葉のの勢つきく實成り却てありなりとおもはる
まへく内地より知りあそむ十日せしむと許くと此を暖候候候しあると此
たちまち花実熟きまじく稲を早種を南種をふめ候ゆへは候とよし
まうて改夷地は五穀蔬菜十分なるに多し海産をゆく候まじく内地より
劣らぬまじく乃圃とるまじく一瞬の間まじくをあるまじく
○蝦夷人を海嶺に住居するもの少まじく山中に住むもの多し是を
山海夷といふ漁事まじくまじく皆去不件或ハ漁場を集り暮る四月は海
より青魚を捕る候夏漁といふまじく時を見合せ昆布も刈り多し八月
二百十日頃より松魚を捕る候秋味漁といふ青魚ハ皆糟ふまじく
水田より上方筋へなる田乃肥し最上のものあり関本より総房より

物乃乃翹を用ゐるが多くは工次を以て漁事を以て例年ラムシヤ
 てふ工次行ふは年中の働代をもちて山へ帰る山獵を以て漁業と
 するあり夷人をまよひ物と修へる一むとつて工と絶てなく其行状淳
 朴ゆへ内地乃中昔の人より比きく魚肉を食ひ糧食を以て三餐時
 次定めぬを嗜むぬ酒と煙草より居る草を以て問の擇或ハト乃
 皮ゆく張り窓一ツ次穿てども日光次照へ入る工と少く屋の掃乃烟出
 ようゆり次をのこ中央は炉を以てまの土間にてキナと稱する庭を
 一重う二重を以てしねる此の床は多くを庭花を以て燃す炉を以て男女
 客の坐次正しく男の右女の左相對して坐をまの庭を以て入る
 めか得るくくみり此の坐は床と死の必ツクナイ工料を以てめとらる工と

りりまの窓の外四五歩隔てイナラ次立るね牆と結るが工其先は鹿の
 頭をつらぬきかゝるありまの窓の板も多くとカムイ 牝の次記するあり
 そまに白ひく窓を穿つまより肉を決して眠るぬるを以て眠るを
 まのツクナイとぬらる殺しる熊乃出入る此の窓よりまの工より漁業
 人も熊とカムイとふまぬ板工もよの敷よりまのイナラ水揚を以て
 工次次造る夷地あり神と祝する幣より江戸より正月十五日用ゐる割掛は
 扱ひまの炉を以てまの長さ一尺不どより何事にもまのイナラと割掛を
 立つ漁事もまの乙名イナラ次割アとく級を以てまの畧とく大
 漁ありん工と祝する工より鶯園先生の夷地よりイナラとつて内地より
 移りる稱あり既し萬葉集卷の十四系歌乃中を陸より筑波稱由

きハ百會ひやくかいよりた右みぎふ左ひだりを分わかちあけりて挿さけりて耳環みみわとて飾かざり
 るを以もつて幼少こどもより耳みみ乃すなはち合あひ口くちに素せめかけばあつらひ穴あなを穿うり
 吳國いごよりも釣つきよきさなり耳みみ乃すなはち合あひ銀ぎん表あの輪りん或あるハ鏡かがみより二ふた重かさも二
 重かさもあらず端はみ玉たまあり少女せうじゆ等らハ捲まり乃すなはち大おほき好このむみさ上方かみかた意い或あるハ加
 賀が城まち後ごよりあつとそ今いま所ところ領りやうとてより右みぎ管くだの仕つか入い城まちさびく杖きんト
 多おほふといふまへ女子むすめハ領りやうハイムダツシツトキてふもの成なり物ものに銅どう鉄てつカラフト
 玉たまとありたあし香か鏡かがみとわけあつてもんけりて上あか古ふるのみまき乃すなはち遠おほ製せいる
 登のぼりさくも首くびより甲こうハけりて横よこ堅かた或あるハ菱ひし形かたち小こ點てんとるも面めん部ぶハ唇くち乃
 白しろりへ雲くもと入いるに口くち傷や美みより奥おく地ぢ離り島しままぐりハるまど去さり目めはた少せう一
 づ乃すなはち遠おほありそハ幼こきと死しより其その母ははマキリ小こ刀たがひの城まちめて傷やつち絞しぼ或あるハ海うみ鷗う

魚いの脂あぶらと焼やき菓か色いろよりうたをとりてかかの傷きず口くちハさきより年とし次つぎ歴れきく色いろ膚かわく
 ろ目めハまぐりマキリみく前まへの工たくまきより幼こ稚ちの身み成なりかかわらく志しき工たく成
 おまの其その母ははの身みよりうてりるまぐりひまの身みも古ふる俗よのまぐりひまも止や
 む工たく成なり得えざるまぐりあわらん白しろ石いし先生せんせい乃すなはち城まち夷えい志しは漆し唇くち用よう青あお草くさ名な曰いは口
 草くさ未ま審しん是これ何なに物ものとありおの口くち草くさといふもの城まち去さ人の古ふる老らう子こ同どうひハ知し
 らびとあつらふまぐり様さま乃すなはち皮かわと焼やきたる灰はい美みわく傷きず口くちハさきよりまぐりあつら
 やごころまき漢かん士し乃すなはち城まち夷えい地ぢ歴れき境けいのまぐり本ほん都とへ来きり子こモ口くちより二ふたシベツしべつハ渡わた海うみ
 乃すなはち死し海うみ合あ船ふねよりまぐりに權けんとてまぐり多おほく美み女めよりまぐり波なみ濤たうよりまぐり
 その舉あ止やの雄ゆうよりまぐり七しち里りの海うみ上かみ苦くくまぐり着つくこの日ひハ海うみ面めん風かぜより
 荒あ波なみの総そうよりまぐり丑うし寅とらよりクナシり島しま乃すなはちセキ地ち方かた成なり亥え子こメナシのシレトコ



押ラウシのふら申の方小突元として猶立ちあつたスリ領の男アカノ女アカ
 二乃高様とぞあらまはるに一入興はりの等乃高人てふものと云ふは死
 むしわふこころ乃地名を尋ね美人のゆめうさめあはしくおらひは
 夷女が手首の入雲と督視へあやもよくつんむやと押のまがもく夷女乃
 ちととらんときと死子モロ乃熱乙名仁助 今度改名 船中になりしがはる板
 灰倍とてんくひひるかういふエンドコタン 江都 乃とのまうとも女のちとぬま
 ちらうがく死し侍るうそを無用みまへ給へんやとひひるけしどが
 流石の薩士も尚然乃理子窘めらる報然とてあつどろるとまん押のとも
 まの仁助あは度と云合あて後信子及びるが美人の中あもゑて藤直ある
 とのこふしを和語も通下公の成執多とも死まわく衆夷と云ふ守一

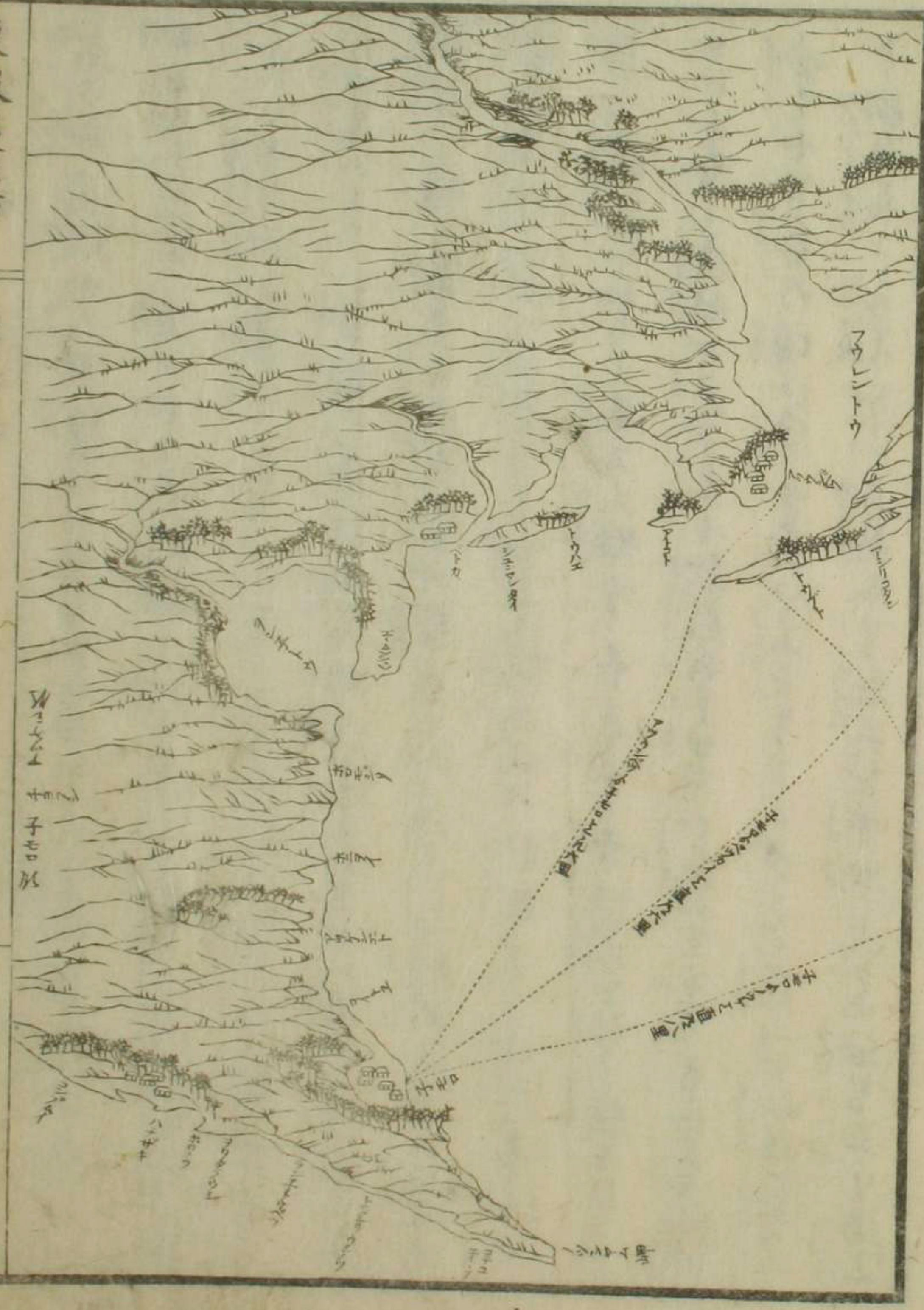


子モロ領中太くこの風俗をあらわめ一もは仁助と魁とまき押のとも又竊り
 按むるふエト口フあはト口乃熱乙名拾六きつワヒツ舎而作の乙名お花
 乃ここの文化度序領とまじしと死より帰化を既子二代の孫なり家居
 ち床を戸障子ありて風俗言語又因乃人まきとてかまらひ情むへ女子
 い夷俗なりとあらまはるも外國は隣に離島の如く又因風子移りたるも
 まつこの 全く其あろひまき衣食もまき活業も徳もまき近藤守重初て
 は名ふ一渡里其上航海乃こ巧なる言因を赤き情といふもの賈奴のきめ
 かりみるり乃まはるに於て衣食をさらあり酒煙草をふるまはるとたらまぬ
 めのあく漁具まきまき美人はと死よりり豊は世次を味かうにあり
 たどバあやエントカムイのいともかへりしあまら乃あまら死に感服を

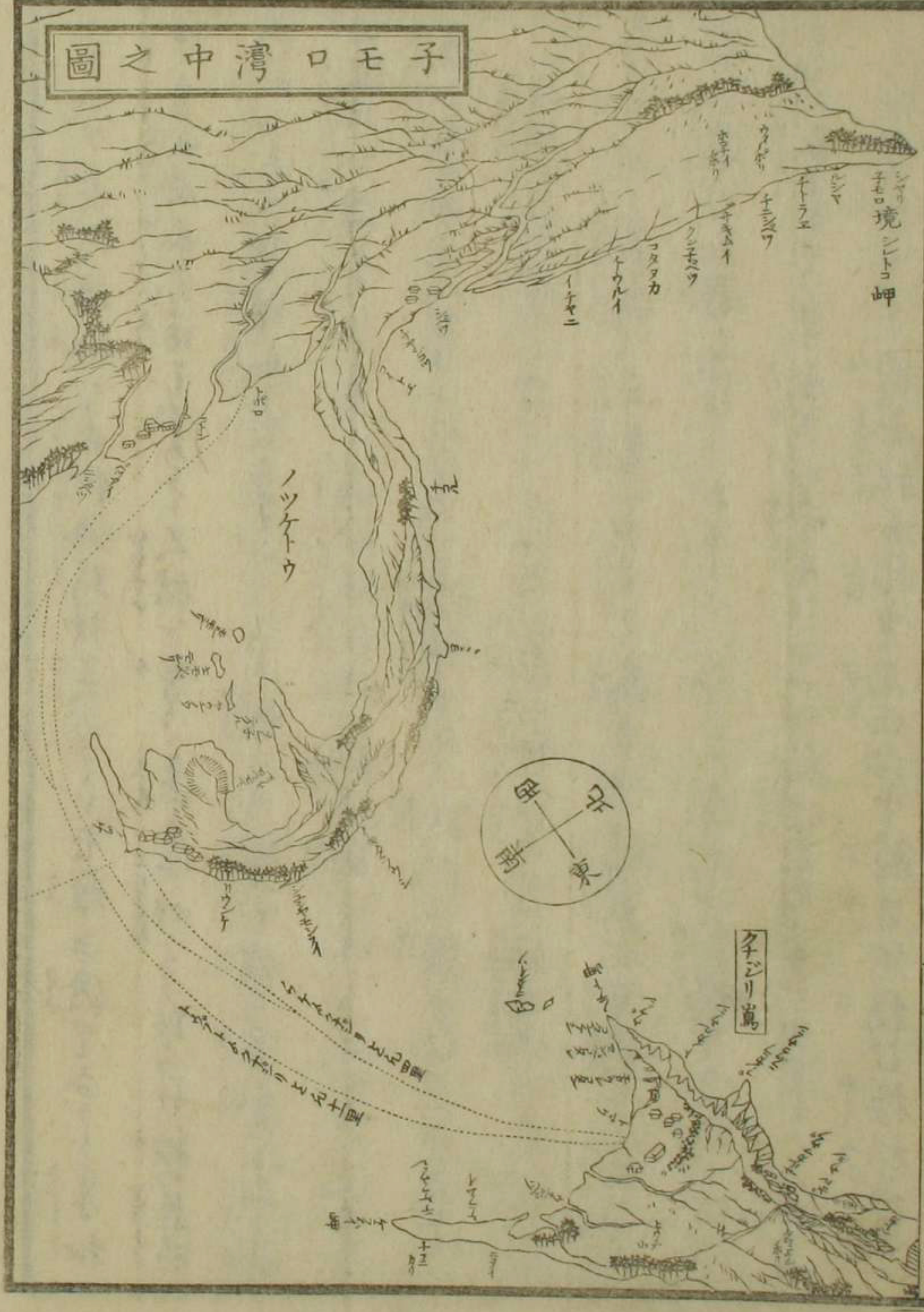
髙塚

東と海と島と東越地乃奥より松前とあると二百里をかり
 その島の先ぐりも二百六十里は色ぎ小極地とあると五十度小
 おまりきさめりき一寛政乃頃むひより海夷が島乃と不量
 せきをさしむの亭和二とさし筑前守友原の安備と正養とを其
 司とて彼千嶋乃と次司とをさしその中もこの島の外園小
 近く且の衛護最厳なる島とてその官吏と探び初り近友重
 茂守重の回鯉を清嘉充其次第兼池惣内ト司五松田仁三布関谷
 茂八希細見権十希曾代るくは雲城なるこの地の大瀧乃離島小
 志く古より船乃由る大やをうらぎるにより安小住夷とも衣食の

乃船とて舟魚捕る具るんどもさしりて以帆をに迫るもの其殺と船を
 彼諸官吏とて次更よることせしふとて摂津園と庫の船人高田登
 嘉と清あるものを海路乃ことに巧るをさしとて乃の次をり奉
 へ船を平らむるに利を路と考へゆるくもめり大船乃由きとて一夫
 あり年々に渡る船たえは諸乃を運送し奥捕乃具も全く備
 りつとも自ら美どもよりその道の道とゆくをトめり衣食も足ることを
 知りて乃舟の踏とわがえを船るたる遠は本邦の方とせしむ
 其國恩と仰ひぐ存まは折は清も外冠乃警衛のそしりて荷國
 益城保るべきふあらざりしが思ひざりき船もひらち人も増へけるをど
 にその國産と出ると教ふ小余とり是天より仁政と助りたまふ



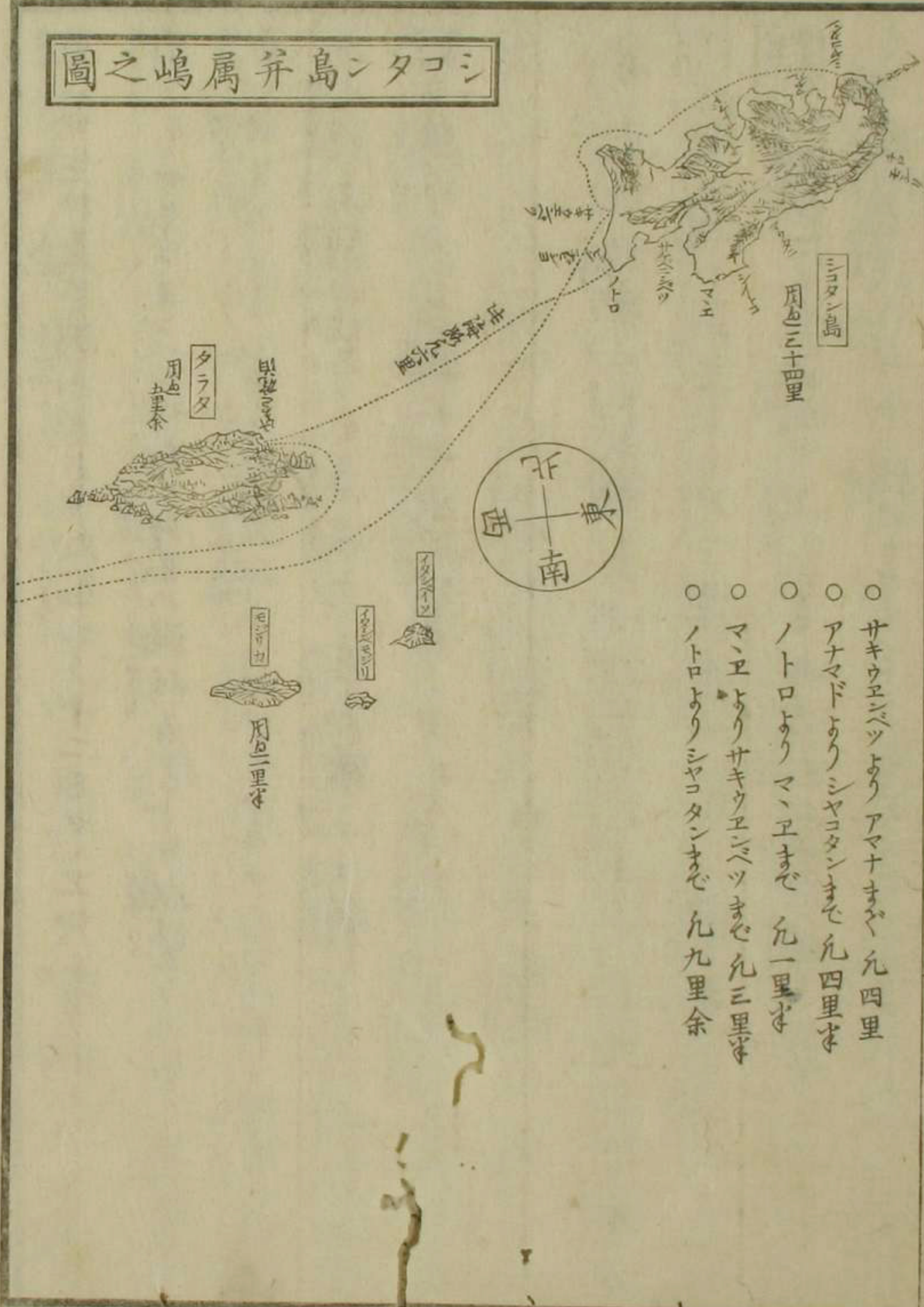
子毛口灣之中圖



のり外一二級の人扱はひ七月乃五日子モ口の去不許子纜と解きは
 日とスイシヨウ島はありく院泊一昨日六日船まがれ帆と法を
 シボツ島へ船とあさましくして帆をり出く夕ラク島まがれ捷ゆくと
 が時々のうらひ香深く互にめ口色咫尺とこうとむ七八反かむとくまぬ
 俱船乃權の鞭るまぬまのかけ替のときさるるとも帆影をさらけんえ
 さるるり押は地へ正まよさるる出る地乃極取みく通船りくも駛
 きぐ久供湯とせし東る大離りありとども幸順風とゆくと捷きけるぐ
 ぬけどもく急形とつとまよさるる船改めさるるお落ぬまありもあまはる沖
 合もや黄昏乃頃より夕日といふまよさるるあまはる感と知縁のあつん
 くと船改めま先くく石具なる老夷と呼出やくふ汝島平生海上

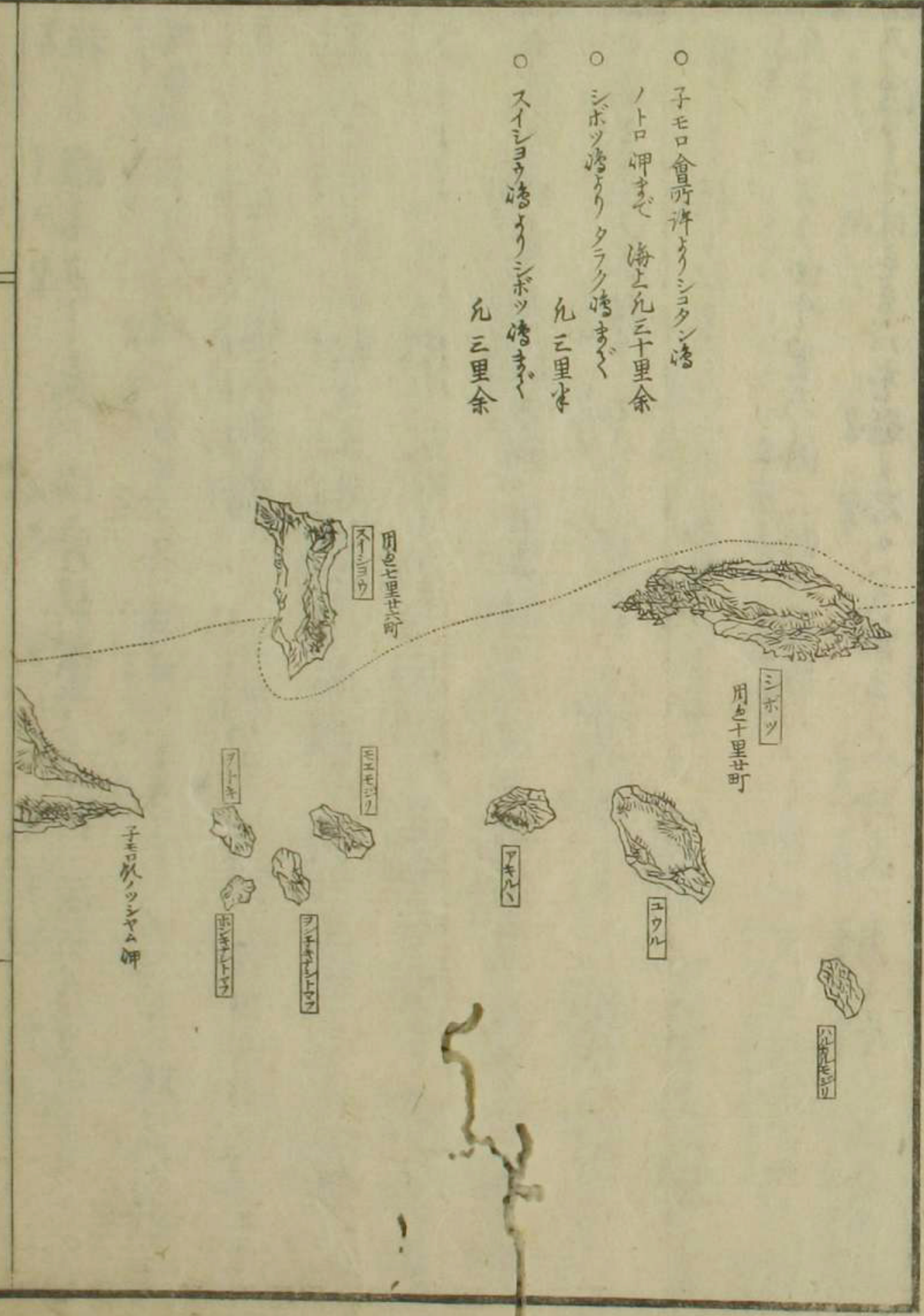
乃業状さるるみぐく久くく乃お得もあまはるおやあそまらまがれ捷
 をあまはるいいらの里程りや時刻とまうてもあまはるくまの何方と
 さして船をきりんとまよさるる今詳論はむさるる時をうしてぬまの
 晴とまらむいよく不便のとうるべしとまよさるるこ乃洋中に院泊を船
 船まあらびのうまの島小由まはる船改めまびへあまはるまどまよさるる何と
 思つるうまはる考つる不遠政色小島まよさるる破ゆりのきさるる正まはる島乃
 近き小島へかく駛船乃沖合よりまよさるる控共まよさるる以とく壘さま
 舵を捻むけさを躰擢とたふ十人のあまはる管民を聲吹りく捨らりか
 折るも秀乃をまよさるる油光の方城依とまよさるる且まはる崖をまよさるる僅まよさるる七町
 を隔てく忽然と一乃島あらまよさるる出ぬ船中の船舵はたまよさるる海を

シタコ島并属之嶋圖



- サキウエニツよりアマナまで九四里
- アナマドよりシヤコタンまで九四里半
- ノトロよりマ、エまで 九一里半
- マ、エよりサキウエニツまで九三里半
- ノトロよりシヤコタンまで 九九里余

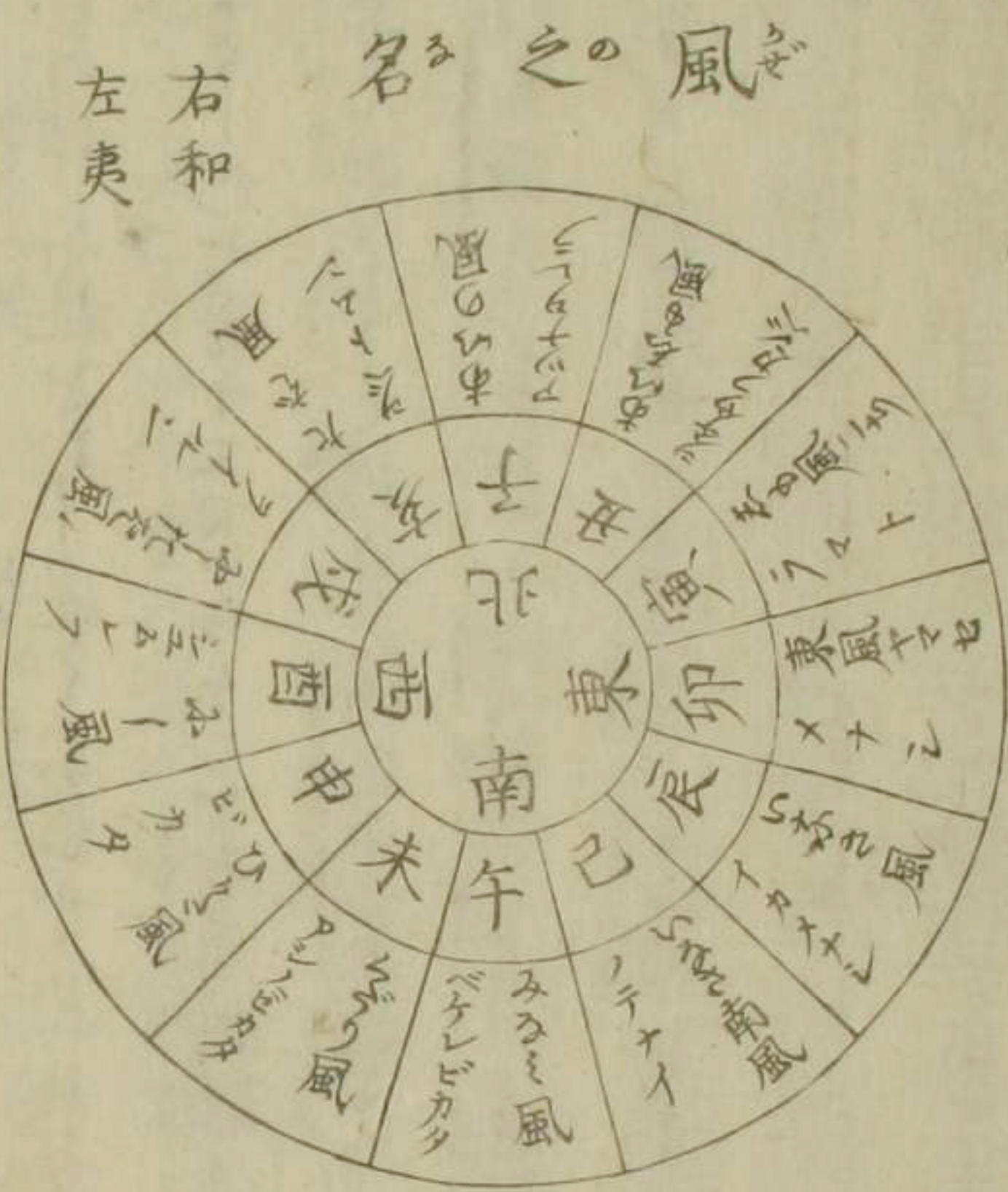
- 子モロ會所許よりシヤコタン港ノトロ岬まで 海上九三里余
- シボツ港よりタラタ港まで 九三里半
- スイシヨマ港よりシボツ港まで 九三里余



松ト、雜木多ク、遠ク海岸絶壁、沖へ若ク荒磯、
 晴礁亦多ク、且バ、岬と云々、
 高ト、奇岩怪石、魁巖ト云々、
 高山、大川あり、
 俣々、二百人、
 多シ、
 後、
 元子、
 乃、
 渡、

早の橋、
 己七月十三日、
 夷、
 乃、
 シヨウ、
 中、
 ひ、
 か、

ころりよりレコタレ海へ渡らむしとともかむひゆく海路のたやまうらぬと
 たり其時の危難をわきまをりて決して果合船をて渡るべき瀬はあつたふらふ
 東にエトロフ海へ由きくると大船をり彼の島へ船とあさるはうけがらむとぞ



左 右 和 夷
 左 夷 右 和
 左 夷 右 和
 左 夷 右 和

因に文化中近藤氏の海夷地より知己(増)不乃書翰と出くはし流とを

上略 東夷夷地通にサワラよりエトモへ渡海このころり九七里北に
 去辰年番舶イギリス差岸乃和より海灣の間モロラるるど行回
 るくウス次修くアブタ小島ウス島山水勝麗ありて頑石の位置
 崎嶇乃措曲恰由益山冢園の如く東夷夷地絶景の才一よりアブタハ
 平垣といどもこどもまぐラシヤマニへの海岸赤石白巖遠は円浦嶽
 大風海乃眺望又奇絶なり六月二日アブタ出立ホロベツへ出海瀬沙
 漠シラオイ。エウブツ。サル。ニイカツ。シブチヤリ。ミツイシ。ウラカワ。シヤマ
 ニ次修くホロイツミにあるエリモといふ海の中へ九三里許由突出し
 たる出立より廻船を箱館江差よりはエリモ次修く等り東夷夷

乃風土も此岬の前後より一変を以てシヤマニよりホロイツミ。ビラウ
 此間海岬を多く修葺絶壁突元とて馬足通ぎ其間チクシキ
 ルイ。トモチクニ皆の崖岬附壁歩をたぐり魚腹と免く石頭岩
 牙を踏歩し飛泉を屯る中岬田きくをどめくビラウへ歩り
 よりまゝ海濱沙漠の地浪煙衣を濡し砂石面をうち才ホツナイ。ト
 ラブイ。シヤクベツ。シラヌカ。クスリ。コンブムイ。ゼンボウジ。マより海を

三三三 アツケシヨ

岬岬云々海へ今三三三と云ふ岬をへ海岬七火也アツケ
 ウレとクスリ 傾との境と云ふ岬の干海の 此地を淡泊をよびく海面より大
 なる海岬を往來するを修葺するの難也
 かの岬より小岬あり 岬の岬をエリモ岬より此岬をへんくをへんく
 岬モジリと云ふ
 の岬トカチの岬岬をとり岬と云ふ岬岬をへんくをへんく
 なる岬をクスリ乃アカシと云ふ岬岬をへんくをへんく

二三三 此中牡蠣の産する所なる奇勝言うべし且ウスル
 其乃大景乃勇一なりアツケを古来夷中の巨艦と唱へ美作も殊
 ぬたぶとく人物も少く不歩の夷俗乃正なる遊雑記も詳し是れハ
 教養を以て去夷地乃方も夷人の賣と唱へ雑記も多し人物も遅
 ウラカワより口を夷人大抵眉毛あか魚食もゆる其言俗も頗相
 遠ゆく夷地夷の方ハ一切作物を存せしは夷乃方ハ粟稗大豆地
 相お好(粟とモレシ口稗炊ヒヤバと唱へ昔義短朝臣この土をり
 と此播種を後へらとて由中傳(既ハサル。ムカワハ義短朝臣の故
 辰とて夷人幣束成なる不有之ハ六月廿三日アツケに出立ビセセ
 へ行く子モ口ハ此地をキイタツア領

クナジリ島東をイツカマツプの出岬西ハメナシ
依云云 藤原朝に今方よりナシト云
 とあり今も今子モロ島のニツツクナジリ
 ヤリ湯ヤリ湯シツヨリシレトコまぐ子モロ去年魯西亞人浮城乃源氏と送り
この島は周回百里ふりふりといふも名は奇石實は天造乃妙なりまがせ、キ
 とりふ海中より温泉沸騰一クサリチといふも自然乃方石中六七寸
 長一丈或ハ二丈ほどあり其雲ととおとせしと鑑の草摺のふくその傍子胃
 形乃石ありまごころのふく方石長二三丈ふり井幹とていふ
 かん六七あり平地ハ方石乃小石波浪ふ塵一々龜甲のふく奇しく言へり
 らん夫人昔源孫州は地ハ甲冑城量多ひハ化ち石とて其其安幹
 名姓と畜ひふふ不佞ハ孔明が魚腹浦八陣石乃ふく即旗旗と建

て多ひ一々六花梅乃隊伍試みらるる選路もも存しきより
 イエレシユマ紫黒色乃角石其上頭ハ移る乃象城さくハ二町ほど
 扇風の下立るらび海とお状おく畫乃下々チツプといふ砂山
 名夏中穿つと三尺ほど砂下皆さくこも源孫州の釈化とて
 砂とてりたるよりハ竹ふチヤノヌブリといふも高さ二四里のふく絶
 頂ハ湖あり湖中島山秀拔ちく雲際ハ塔を眺乃水乃西ハ
 流しとて瀑布とてり次レヨウチベといふも流しとて大川とてり子
 ベツといふ山のメナシよりエトロフとて一里とて実ハ海内身一の神山
 とていふ登きと外ルヨウベツ乃紋巖ハウチその沸湯のふく絶を双
 名不佞クナジリ島乃八景城地王進く移梓の候とていふこの島名

福ふく魚類を捕りて船の海面九一里余も充滿し海岸の底に
 島より船を擧げよきやうにわたりて乃と時を以て捕りて一網に九二三
 千本入にマヤのメナシの鱈も一枚ありこの本乃と今に云ふ
 ちく曾冬が口尻低く世人に信せざるがごとく猶ほいさく又
 欽が産まは國のいさくは浮屠ふ入乃地の中子富大川ともみふ
 神代渾沌のちくは清津の山奥乃美人を白髪髪本皮と
 彼を食ふ公家とやうく大俗衆を解脫せしを幸甚と存す人
 さく國をアトイヤと云ふハト口乃渡り口は松花より九二
 百余里極星を四十度ふとあり順風とおまら七月廿二日一系乃
 夷舟よて恙なく渡海せしに此渡り一聖終よ七里ふと云ふ

ゆども荒沙の強き江既乃沙は二倍とく逆浪四面に沸騰し九一
 丈五尺も底に陥りて十五六回をめぐり友舟の帆も互にお互
 ねど乃とを茶根本皮吹ひく燬し合をり夷舟よと擧げ渡ること
 ありし夷人も毎に溺没乃患へて是ありと云ふ也由既符吹と云へ
 必し又擧げし渡海せし者岸の頃ハ沙風より半面懸髪と云ふ乃
 ごとくにおぬれしと云ふの荒沙乃深きおぬれし日本入更に渡海
 するもの多し夷人も幸ふき度程の程本のとく周囲は東ト口乃
 一月奉人渡海すし不佞と合をり僅に日度子返りし夷舟より波の鳴
 人も日本入と云ふはく是をいし物なりとのことおぬれ不佞も既し溺
 波と云ふはく是をいし物なりとのことおぬれは具乃の皆顔色を青鬼

古くさし内北乃其もちやく渡りてありあふべしケマシントコホ
り子差を多くハ鞆絃唐茶ありケマウニベ内北乃行差あり或
匣角鹽カウ乃の状貯り皆を國を貴乃人の調度なりとも先
日用乃のさし且そのさ乃いまさぬ後必香華院ハ附属さる
市店ハ墜ち終り遠き夷地さく流しあり人の花差るらん
其紋不みさるるさる夷人乃今わらく寶物とほし珠をさるハ佩刀
鐔縁頭乃類あり金銀鋼鉄錫の區別ありとも皆仕入あり甚
粗末さるの多し後友の海夷形さるといふめハ今ハ稀なりたま
法さし夷人も交易或ハ價乃為よ散さる果ハシヤモの有とき
款ありきさるるさるの項あり子モ口領の内ニシツグトよりボシケ子カ

色紙クすり領の夷人ハかの寶物さるる渡りてハ川を合
料の鮭とさるる喰つるなりとのさるるさるる寶の丸は紙さるるさ
る今銀珠の通用ありさるることハかの且夷人の遊田さるるさる
ふよりさるる道具とさるる其差ハ香附の盃盤揚箸唐櫃ハ香櫛
皆料紙管角鹽匣湯桶切ツ豆の類なりとも府絃紋さるる格別あり
きりめありあさるるアツケハ人態者のさるるさるるハ九百七十年を
りてさるるさるる且も今乃府給あり口方角の内ハ二の差あり内ハ
二の字丸の内ハ深永樂後ハ柏り及角立の内ハ目結ハ丸の内ハ
丁子若るる盃盤揚箸ハ何れの家も不持きこも自ら彫り内地ハ
漆塗りに仕あけさるる塩夷地ハさるる又さるる二尺五寸厚り二尺ハ

白紙

二尺

五寸

一類乃縁をひきくゑ組方よりる是も今いさめては其部落中にて
とりやうとまとのを角小シヤモ地より入るむ者ども己名乃丸持あゝ夫
女子密約るまらひ美女も夫等の若ひ吹うる是ハ身と勞さばく衣食
ふ色ドから秘を自くらふ人と云々嬌心果ハ録史のまきくうり夷中の
不平と生むるやうにきりゆくやうなる次はび公乃法不墨とるてか
を因道乃こまごう整風を悉く制さる是之絶と賑ハ録史と恤ハ夷
中に男女乃ぬさやハ死の死えらと嫁めまぐる一もつとるまびシヤモハ
ゆゑとまびあらむとまると吐暖とく止まざりども夷人みおひては管着
市仁政の難るこ次感トありのまびこれまびシヤモに後夷女と妻
みもあらむ其うちあらふも二三人生さく夷中の難も生ひををばと

シヤモ種とり身ふはつる毛の落く疏りく自然夷種不異なるあり
おの目石はくひーセカチ 若きあつと 六助茶十六シヤモ種うくく華言
み通トを國の片假名文字と能くと朝夕おの目石はくると忠實ハ
庖厨の工何れとん次の日を働き食物の塩梅味まき妙なりいまあは
と島丸転きく茶菴葱ると植る野菜と地を食料に充く山海とあさ
く漢獵とるま化乃少年の及むる不あまたりかの目彼の地より蒸杭と將
来るハこの六助が捕まぬるあさりさく夷地は蒙瘡を行むるまども
麻疹乃工といまご関をアツテを東夷あさり乃一大部あるじが天保
の度蒙瘡を流行さく割湾中海嘯の為ハ去人過す亡びたりとを
夷人ハ皮膚堅実るが由を表推托乃割ハ死るぬさる瘡毒内陷

ちやましくこどぐさをも不斃うり十乃八九ありあかぬりて裳瘡をかそゆて
 内地にて疫癘と恐るよりもえり甚しく親を子と廢く子を親と顧む
 ちやましくこどぐさをも不斃うり十乃八九ありあかぬりて裳瘡をかそゆて
 西
 洋諸藩より専行りて牛痘乃術とて其の城探まをらるる東西の城
 夷化をさらうり小旗夷の莫エトロフの離島もぐきるは夷人の疎札と救
 ひたまるる廣大乃法仁意即ちくもあまごりて是の時中撰びてけりしを
 江戸深川舟年橋より多葉田立高より東都とエトロフ海まぐりきこて
 年みくく屏府せり大坂町に住居を并上元長といふのりうりおの目竊り
 かりふおかやどに厚き田舎とあましく今度夷俗を四圍風化しやまき
 作しとまりとよも免る角お唇をく速やかとみまらば警へ終へく警へ

漸くおあしとたまりてまど髪あらねを若くくカムイ飲乃と死イクバシ
 てふのあま髪かきあげそとくも若くあることぞういふもの髪ふくは格
 好市く合掌獲絆もかきあげ髪を接るに禮をこし種々乃きし法之あり
 とく髪を剃るはゆるしやせうとを理なきしやもあまを既よ畜去よりも培
 夷化さる毛人團といふものやうもあまに生ふる毛の多しとく髪を束
 めるはと乃てお髪くもあらねど髪を剃るに長きとる多くおの人を毛髪
 の濃きあま髪を剃るはゆるしやせうとを理なきしやもあまを既よ畜去よりも培
 人の髪をかきくはいさ遺化し怖るしやいせんさるは頓く団地より後後
 乃人民進く殖えおきお風化見ならひ美しきあまのゆえ見ゆらん其自ら
 四圍風化さるくまんかゆらん

東坡志林

卷之八

東坡夷夜話卷之上終



